

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：28001

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12847

研究課題名（和文）モザンビークの多言語状況と音楽実践

研究課題名（英文）Multilingual Situation and Musical Practices in Mozambique

研究代表者

松本 麻耶子（古謝麻耶子）（Matsumoto Koja, Mayako）

沖縄県立芸術大学・芸術文化研究所・研究員

研究者番号：60835734

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、モザンビークに住む人々の実生活における使用言語、アイデンティティの複数性のあり様と文化継承のダイナミズムを、音楽実践の場に着目しながら明らかにすることを目的として4年間行われた。フィールド調査と文献調査から、現代のモザンビークで盛んに行われる対話的音楽創作では、多言語状況が育んできた共生のための知恵、また、植民地支配や独立を経験した人々の共通の歴史意識などが反映されていることなどを明らかにした。また、申請者が現地アーティストとの音楽創作を行うことで、異なる言語や音楽スタイルを身に付けた者同士が、どのようにコラボレーションを行うのか、そのプロセスを詳細に明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

異なる言語や文化を持つ者同士の音楽的コラボレーションを見ていく際に、研究者自身も演奏に参加することで、国や人種を超えた尺度で、音楽創作と多文化共生というテーマを捉えたり、音楽的コミュニケーションを行ったり、議論を交わすことが可能となり、研究を行う際にあらかじめ設定していた枠組みそのものを新たな角度から見直すことにつながった。また、観察者の立場からインタビューを行ったり、演奏の様子を記録するのではなく、創作に参加しながらプロセスを体験することが、身体性など言語化しにくいものを分析していくことにつながるという実感を得た。この手法を追求していくことは学術的にも意義が深いと思われる。

研究成果の概要（英文）：This research project, conducted over a four-year period, explores local languages such as Chopi and Chewabo language used by Mozambicans in their daily lives. It explores local language and its relationship to multiple identities and the dynamics of cultural transmission in the context of musical practice. The researcher's musical creations in collaboration with local musicians served as a basis for analyzing the process of collaboration between people who have acquired different languages and musical styles. The data collected during the ethnographic fieldwork and literature review revealed that the interactive musical creation emerging from contemporary Mozambique reflects the wisdom of symbiosis fostered by a multilingual society and the shared historical consciousness of people who have experienced Portuguese colonization and independence.

研究分野：民族音楽学

キーワード：多言語社会 音楽 モザンビーク 音文化 多文化共生

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

モザンビークにおける公用語はポルトガル語だが、現在においても全国各地で「現地語」と呼ばれる多くのアフリカ諸語が話されている。長らく無文字社会が続いたモザンビークでは、各民族の文化的多様性は互いに関係し合いながら継承されてきたが、こうした言語継承のあり方を、身体的パフォーマンスや、過去に作られた歌を自分のことばで再生産するという芸術的な営みと関連づけて考える研究はこれまで十分になされてこなかった。多様な文化的要素を取り入れながら「伝統」をクリエイティブに継承し、さらにそれを自己表現と結びつけていくという、現代を生きるモザンビークの人々のしなやかさは、異なる民族同士の共生のあり方をも反映しており、グローバル化が進む中で、アフリカ以外の地域の文化継承を考えていく際にも重要であると考へた。

2. 研究の目的

モザンビークでは生活の中で現地語の歌を歌ったり、既存の伝承歌をアレンジする形で創作を行ったりすることが日常的に行われている。本研究では、その実態を明らかにするとともに、近隣の民族の言語や音楽様式が混じり合いながら歌が作られていっているのか、あるいは、差異を保ちながら次世代に受け継がれようとしているのかを考察するものである。

また、モザンビークにおける各民族のあるいは独立後全国的に共有されている「歌」や「曲」が決して固定され閉じられたものではなく、その輪郭が自由に再編されていく開かれたものであることと、多言語状況の豊かさを結びつけて考えることができるのかについて、歌が生まれる現場での参与観察を行いながら議論し考察する。

3. 研究の方法

本研究を申請した段階では、フィールド調査を主な研究方法に据えており、モザンビークの首都マプト市のショピ・コミュニティとシュワボ・コミュニティで参与観察を行う予定であった。しかし、1年目と2年目はコロナ禍で渡航が不可能であったため、オンラインでのインタビュー調査やこれまでに収集した情報をもとに研究を進めた。3年目、4年目(1年延長)は、3度(合計8週間程度)渡航しフィールド調査を行った。また、文献調査も並行して行った。3年目の渡航では、研究者もアーティストとの音楽創作に参加しながら研究を進めた。

【文献研究】

言語政策や文化政策に関する文献を精読・検討し、モザンビークの多言語社会の問題の政策的なアプローチを整理した。また、現地の研究者の先行研究や音源資料を主に参照しながら、モザンビークにおけるポピュラー音楽の発展の経緯と文化政策の関わり合いを考察した。

【フィールド調査】

モザンビークの首都マプト市には全国各地の出身者のコミュニティがあり、そこでは各民族の芸能や言語が継承されてきているだけでなく、他の民族のリズムや旋律、言語を借用するということが頻繁に行われている。モザンビークの人々が、他地域の民族の言語や音楽、踊りに、どのような距離感あるいは所有意識を持っているのか、他地域のリズムや旋律、言語を借用して音楽を作ることが、どの程度許容されているのかを明らかにするために、インタビューや音楽分析で研究を進めた。

【研究者のセッションへの参加】

3年目のフィールド調査では研究者自身が現地のアーティストと一緒に10日間ほど集中して音楽コラボレーションに取り組みその様子を映像に残した。それまでは、観察者としてモザンビークの人々の音楽実践の様子を記述していく研究スタイルで進めていたが、自らが演奏を行うことで、より詳細な部分が見えてきたため、4年目のフィールド調査の際も音楽セッションへの参加を継続した。また、2023年の11月にはアーティストが来日するのに合わせて沖縄本島でコラボレーション作品を上演した。準備や上演の様子は全て記録し、分析の材料とした。

4. 研究成果

本研究では、モザンビーク国内の伝統音楽やポピュラー音楽の多様性と多言語・多文化社会の関係性に多様な観点から迫った。

コロナ禍で渡航が不可能だった1-2年目は文献調査とオンラインによるインタビュー調査で研究を進めた。言語政策や文化政策に関する文献、デジタル資料から、モザンビークで現地語 *língua local* と呼ばれるものの呼称、数え方、分類方法は統一されておらず、未整理なまま使用されていることが明らかになった。また、モザンビークの国内の音楽の分類基準も、言語と同様に曖昧であった。例えば、ポピュラー音楽と伝統音楽の境目が非常にあやふやだったり、多様な種類のポピュラー音楽が「伝統的フュージョン」の名称で大雑把に括られたり、その括られ方に一貫性がなかったりする。このような言語や音楽の分類の曖昧さは、国内で繰り広げられるジ

ジャンルにとらわれない音楽実践や、多様な言語が統一化されずに継承されていくことと相互影響関係にあると思われた。

現地語は、アイデンティティの要素としてだけでなく、コミュニケーションの要素としても重要視される。モザンビークでは、公用語のポルトガル語や母語のみならず、さらにいくつかの現地語を話すことができる人の割合が高い。伝統音楽とポピュラー音楽を行き来しながら創作を行う現地アーティストに、歌に用いる言語について質問すると、真っ先に母語を挙げる傾向があったが、母語以外の現地語を用いることもあると答える人も多かった。また、インタビューに応じたほぼすべてのアーティストが、多様な民族のリズムを自分の歌に要素として取り入れることがあると述べていた。国内の多様な人々を惹きつけるためには、自分の母語のみで歌ったり、公用語であるポルトガル語で歌ったりすることよりも、多様な現地語で歌うアプローチの方が効果的でオリジナリティも生まれると捉えられていた。また、多言語で歌う理由として、「自民族主義ではないことを主張するため」と述べるインフォーマントもいた。モザンビークのアーティストは多様な文化的要素を組み合わせながら、時に複数の言語をも混ぜ合わせながら創作を行っており、ジャンルよりも、個々の音楽的文化的背景に重きを置きながら演奏を行う傾向があった。その結果、国内の多様な伝統的なリズムを土台としながら、枠にとらわれない多様な音楽が生み出されていた。以上の内容に関しては、2021年に東洋音楽学会支部例会で発表した。発表において用いたインタビューの映像などは、後日モザンビークの研究者やアーティストと共有し、議論に用いた。また、コロナ禍でフィールド調査を行うことが不可能だった期間、研究者の住む沖縄県の多言語状況や言語継承の危機的な状況にも目を向け、少しずつ調査を進めた。そして、モザンビークでフィールド調査を行う際に、その内容を共有した。自分の地域の話と共有することで、コミュニケーションがより双方向的で深いものになった。

3-4年目は、フィールド調査を3回行った。フィールド調査では、インタビューの対象をアーティストだけでなく一般の人々にも広げた。独立後のモザンビークでは、国民統合や脱民族主義が謳われ、その思想が広く浸透したと言われているが、個々人にインタビューを行うと、民族間の不平等が存在するという意識が今も根強く残っていること、差別で苦しんだ経験を持つ人が少なくないことが明らかになった。2022年8月に行った首都のシュワボ・コミュニティで行った言語と音楽実践に関する調査では、中北部から来た人々に対する差別が数年前まであからさまに存在していたことが、多くのインフォーマントによって語られた。紛争時に戦闘で荒廃したザンベジア州のある地域から移住してきた彼らは、自分の地域の言語を話すと揶揄われたと話していた。そのような中、「シュワボ人の集いの会」を結成し、定期的に集まりシュワボ語の歌を歌うようになったようだ。「葬式と結婚式では自分の母語で歌いたい」という思いが人々を結束させたと話している人もいた。近年、状況は変化してきており、シュワボ語話者への差別は行われなくなってきたようだ。現在はシュワボ・コミュニティ内や近隣に住むシュワボ人以外の人々も、シュワボ語のポピュラー音楽を聴いたり歌ったりするという。シュワボ人以外の人々がシュワボ語で話したり歌ったりするという行為は、シュワボ・コミュニティにおいて非常に肯定的に受け取られていた。シュワボ・コミュニティでの調査結果の一部は、論文としてまとめ沖縄県立芸術大学の学内誌に投稿した。

本研究で行った調査では、自分の母語を他の民族が学んだり話したりすること、自分たちの歌を他の民族が歌ったりすることに対して拒否感を示す事例は見られず、むしろ喜ばしいことと捉えられる傾向が強いことが明らかになった。このようにお互いの言語や音楽スタイルを共有することが許容されているからこそ、異なる文化的背景を持つ者同士のセッションが可能となり、互いが経験の中で培ってきた技術や音楽的要素を交互に選択しあったり混ぜ合わせたりする手法が積極的に選ばれるのだと思われる。2023年の2月、8月には研究者自身が現地のアーティストと協働で音楽創作を行った。創作のプロセスを通して、モザンビークの人々の音楽実践における「伝統」が意味するものや、セッションにおける奏者同士の関係性、また、それぞれが「自分の音楽」をどう捉えているかということについて、深く議論することができた。研究者自身が音楽セッションに参加することで、国や人種を超えた尺度で議論を交わすことができたことは大きな収穫であった。研究を行う際にあらかじめ設定した枠組みを新たな角度で見直すことができた。

2023年の11月にはモザンビークからアーティストが来日するのに合わせて沖縄本島でも創作作品の上演や即興的なセッションを行った。また、モザンビーク人アーティストと沖縄の言語で一人芝居を行う役者とがコラボレーションを行うイベントを企画したり、言語継承と音楽実践というテーマで意見を交わす場を設けたりした。

セッションに参加したり議論したりすることで得た大きな気づきは、歌や楽曲は演奏する度にその輪郭を変えるということである。実際に音を生み出す人間を中心に据えているため、既成の曲やジャンルなどが持つ規則は、その場にいる人間同士のコミュニケーションによって臨機応変にゆるやかに変更されていく。このような対話的音楽創作は、独立後の文化政策の影響や急激な社会変化の中で発展してきたと思われるが、長い時間をかけて地域でコミュニティの人々が継承してきた音楽や踊りの中に、もともと「多様な表現」を受け入れる仕組みがあり、それがしっかりと土台となり新たな要素も取り入れつつ展開しているのではないかと思われた。このモザンビークで育まれてきた対話的音楽創作を、多文化共生の知恵の一つと捉え、「アフリカ潜在力」という視点とも関連付けながら考察し、東洋音楽学会第74回大会で発表した。現在発表した内容を論文にまとめている最中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 古謝 麻耶子	4. 巻 24
2. 論文標題 モザンビークの首都マプト市におけるシュワボ人コミュニティの言語状況	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 沖縄県立芸術大学音楽学研究誌『ムーサ』	6. 最初と最後の頁 29-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古謝 麻耶子	4. 巻 23
2. 論文標題 モザンビークの解放闘争期に誕生した革命歌の変遷	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 沖縄県立芸術大学音楽学研究誌『ムーサ』	6. 最初と最後の頁 41-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古謝 麻耶子	4. 巻 51
2. 論文標題 沖縄のわらべうた継承の現代的特徴 蛭を題材にしたわらべうた《じんじん》に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 沖縄キリスト教短期大学紀要 = JOURNAL of Okinawa Christian Junior College	6. 最初と最後の頁 61～71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34579/00000558	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古謝 麻耶子	4. 巻 22
2. 論文標題 多言語国家モザンビークにおける現地ミュージシャンの音楽実践ー使用言語・音楽スタイルに着目してー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 沖縄県立芸術大学音楽学研究誌『ムーサ』	6. 最初と最後の頁 53-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 古謝 麻耶子
2. 発表標題 多言語国家モザンビークにおける現地ミュージシャンの音楽実践－使用言語・音楽スタイルに着目して－
3. 学会等名 第75回東洋音楽学会支部例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古謝 麻耶子
2. 発表標題 モザンビークで育まれてきた多文化共生の知恵と対話的音楽創作
3. 学会等名 東洋音楽学会大会第74回大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

モザンビーク人アーティストMatchume Zangoとのコラボレーション作品 https://youtu.be/4_PDQ6bdDqg 沖縄でのセッション https://youtu.be/txVa7exH8kE?si=2-TnKNUir2jC6uGc
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------